



上演演目データの整理・分類における諸課題：18～20世紀のオペラ公演を例に

岡本，佳子；坂部，裕美子；神竹，喜重子；荒又，雄介；辻，昌宏；大河内，文恵；平野，恵美子；小石，かつら

(Citation)

デジタルアーカイブ学会誌, 7(4):e39-e44

(Issue Date)

2023-09-25

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(Rights)

クリエイティブ・コモンズ [表示 4.0 国際]

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100488696>





上演演目データの整理・分類における諸課題： 18～20世紀のオペラ公演を例に

Issues with Structuring and Classifying Performance Data: Focus on Opera Productions from the 18th to the 20th Century

岡本 佳子¹ 坂部 裕美子² 神竹 喜重子³ 荒又 雄介⁴ 辻 昌宏⁵
OKAMOTO Yoshiko¹ SAKABE Yumiko² KAMITAKE Kieko³ ARAMATA Yusuke⁴ TSUJI Masahiro⁵
大河内 文恵⁶ 平野 恵美子⁷ 小石 かつら⁸
OKOUCHI Fumie⁶ HIRANO Emiko⁷ KOISHI Katsura⁸

1 神戸大学

2 公益財団法人統計情報研究開発センター Email: YumikoSAKABE@sinfonica.or.jp

3 東京藝術大学

4 大東文化大学

5 明治大学

6 東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校

7 中京大学

8 関西学院大学

1 Kobe University

2 Statistical Information Institute for Consulting and Analysis

3 Tokyo University of the Arts

4 Daito Bunka University

5 Meiji University

6 The Music High School Attached to the Faculty of Music, Tokyo University of the Arts

7 Chukyo University

8 Kwansei Gakuin University

(受付日：2022年12月20日、採録日：2023年6月1日、電子公開日：2023年9月25日)

(Received: December 20, 2022, Accepted: June 1, 2023, Published electronically: September 25, 2023)

抄録：本稿は18～20世紀ヨーロッパ歌劇場における上演傾向研究の一環として、フィールドワークと文献による興行情報の調査結果をデータ化・蓄積するにあたっての諸問題を提示する。具体的には、ポスターや年鑑からデータを抽出・統合する際、資料の選択、視覚的側面の配慮、項目や備考欄情報の取捨選択、上演言語の特定、作品の改変による紐付けが困難な場合がある。とりわけ、各資料の掲載項目自体が、地域や時代固有の価値観を色濃く反映していることから、それらの価値観の保持は統一的なフォーム作成の意図と相反することがある。様々な資料の比較から得られたこれらの知見を共有することは、データベース作成への新たな視座を提供するものであろう。

Abstract: This paper aims to highlight issues with database construction for opera productions' performance data. The research project has used literature research and fieldwork to collect performance data from several theater performances to analyze changes in and expansion of music theater performances from the 18th to the 20th century in Europe. Various resources were used, such as posters and playbills from different regions and periods. Since these items reflect the values in each period, elements such as data items, type, and layout, show what was significant for the viewers. These differing elements occasionally compete against the purpose of constructing a unified database. The findings drawn from resource comparison have provided new possibilities for database construction.

キーワード：歌劇場、劇場、オペラ、上演演目、レパートリー、データベース

Keywords: music theater, theater, opera, performance data, repertoire, database

1. はじめに

演劇や音楽は、美術等の造形芸術と比較して作品自体が「残らない」ため、その上演の実態を知る手は限りは限られる。古代ギリシア劇の復興を目的に16世紀末のフィレンツェで誕生し、こんにちなお世界各地で上演されているオペラもその一つである。その誕生から、いつ・どこで・どのような形態で上演されたのか。上演に際して台本作家、作曲家、興行師、演出家、指揮者、美術家、演奏者、ダンサー、技術者等の大人数が関わっているゆえに、上演形態を決定づける諸条件や要素は無数にある。特に近年のオペラ研究におい

ては、作曲家による有機的な単体の作品として扱うよりは、劇場内での興行や上演も含めた一連のイベントとしてみなし、これら諸要素を様々な研究分野からアプローチすることが主流となっている^[1]。

これらの要素を整理し、上演傾向における言語・地域間の影響関係や、歌手や指揮者の移動の実態、そして同時期に台頭した近代メディアや民族主義との関連、さらにはそれらの結節点としての劇場の役割を明らかにできないだろうか——このような課題意識のもとに、本研究チーム^[註1]では18～20世紀初頭のヨーロッパの主要音楽劇の興行データの蓄積と分析を行っ

ている。

具体的には、①世界各地の歌劇場／歌劇団の上演データベースの公開状況の調査、②フィールドワークと文献調査によるヨーロッパ主要歌劇場の資料調査と上演演目調査、③上演演目を含む、収集した興行データを整理する分類方法の案出に取り組んでいる。最終的には、個別の調査データを作品分析や成立史の単なる補助的手段としてではなく、能動的ツールとして使用する音楽劇研究の方法論を提示することで、広く文化の言語間・地域間の影響関係を可視化するのが本研究のねらいである。本稿は、②と③で得られた、データ化と蓄積にあたっての諸問題を提示することで、データベース作成の実践論文とするものである。

2. データ化する対象

上演作品の記録は、主に各国の図書館、劇場資料館や文書館などに保管されている。年代や地域によって失われた資料も数多くあるものの（例えばキエフのオペラ上演史については、1896年の市立歌劇場の大火災によってそれ以前の上演記録の大半が焼失してしまった。2019年11月16日にウクライナ国立歌劇場文芸資料館長のラリーサ・タラセンコ氏に神竹喜重子が取材している^[2]）、2000年頃からはそれら資料群を収録した上演データベースがCD-ROM形式やウェブサイト上で急速に公開されるようになった。例えば、スタンフォード大学図書館が公開している *Opening Night! Opera and Oratorio Premieres*^[3] は、オペラとオラトリオの初演データを集めたデータベースであるが、この原型は *From Don to Giovanni: opera database; oratorio database*^[4] というCD-ROM版として刊行されたデータベースである。その後、改訂版刊行ののち（2010年）、スタンフォード大学図書館に引き継がれて2013年からインターネット上で公開された。以降も更なる移行（2019年）や改訂を重ねて現在のようになっている。上演データベースの発展がよくわかる例だと言えよう。他にも主要な公演データベースとしては、1996年からプロジェクトが開始され2000–2001年に公開された、ブロードウェイの公演データベース *Internet Broadway Database (IBDB)*^[5] や、2012年からの *Spielplanarchiv der Wiener Staatsoper* [ウィーン国立歌劇場 上演演目アーカイブ]^[6] などがある（なお大矢未来「近年の音楽劇データベースの公開状況」^[7] は2016年時点での主要データベースについて詳しい）。これらにより、それまで各地に分散していた資料を統合し、包括的な比較研究を行う土壌が整いつつあるのが現在の状況である。これら上演記録の資料形態は複数あり、大きく分け

ると下記のような5種類に分けられるだろう。

- ① 劇場の内部資料としての上演記録
 - ② 公演ごとに発行された当時のポスターやチラシ
 - ③ 当時の新聞や雑誌に掲載された告知や批評
 - ④ ①②をもとに劇場が周期的に発行する年鑑や年報等
 - ⑤ ①②③④をもとに後代の研究者がまとめた資料集
- これらのうち①②③については主に各劇場や文書館、図書館等で保管されていることが多い。④は現代でも「劇場開場200年記念」などの記念年に発行されることがあるため、一部は⑤と重複する。さらに、①～⑤を利用した研究書において、付録や表の形で上演データを掲載しているものもある。

3. データ化にあたっての課題と検討すべき事項

本章では、前章の資料種類の②、③、④、⑤を用いた、筆者らの調査によって現れた検討課題を提示する。これらは実際にオペラの興行情報をデータベース化していく際に出た課題や、留意して今後検討していく必要のある事項である。

3.1 どの資料を選択するか

前章で示した通り資料の種類は複数あり、一つの公演情報をデータ化する際にどの資料をもとにデータベースを作成するかは第一の検討課題となる。資料によらず同じ情報が掲載されていれば理想的だが、資料によって事実誤認が含まれていたり、公演が何らかの事情により予告通りに上演されないこともある。以下で例を見てみよう。

例えば、レヴァシェワ編の『ロシア音楽史』全10巻（2011年）の第10巻第2分冊は、19世紀ロシアにおける地方都市の上演データ集である（資料種類⑤）。ここでは1892年のムソルグスキー（Modest Mussorgsky, 1839–1881）《ホヴァーンシチナ》キエフ公演の興行師はプリヤニーシニコフ（Ippolit Pryanishnikov, 1847–1921）との記載があるが^{[2][8]}、当時の新聞『キエフの言葉』（資料種類③）を確認するとセトフ（Josif Setov, 1835–1894）の興行であることがわかる^{[2][9]}。作曲家や作品上演研究の場合、これらの情報の正誤は研究の根幹を左右する場合もある。

さらに、公演が何らかの事情により予告通りに上演されないこともある。オーストリア国立図書館デジタルアーカイブに収録されているウィーン宮廷歌劇場（現ウィーン国立歌劇場）の公演ポスター（資料種類②）^[10] では、予定されていた公演に急きょ変更が発生した際に差し替え用のポスターが刷られている。

図1、図2はその例である^[11]。図1は1898年8月1日の公演ポスターで、ヴァーグナー（Richard Wagner, 1813–1883）による《ローエングリン》が予定されていることがわかる。図2が変更後の差し替えポスターであり、ポスター上部には「シュメーデス氏の突然の声のかすれにより、《ローエングリン》に代わって《さまよえるオランダ人》（Wegen plötzlich eingetretener Heiserkeit des Herrn Schmedes statt „Lohengrin“: Der fliegende Holländer）」という変更理由も書かれている。

このように差し替えポスターが出ている場合は明白であるものの、変更後の情報が事前には刷られていない場合もある。その場合は裏付け調査として、資料種類③である新聞や雑誌に掲載される、後日発表された

情報を辿る必要があるだろう。

3.2 ポスターやチラシの視覚的側面

①の公演ポスターや、チラシ等をもとにデータ化する際、それらの資料には単なる上演情報だけではなく、文字の大きさや配置等の視覚的な要素が含まれており、それが当時の価値観や世相を反映していることがある。

例えば、図3はシエナ（イタリア）のアカデミア・デッリ・イントロナーティ（「アカデミア」とはイタリアの各都市で16世紀頃から複数結成されていた知識人グループで、一部はオペラ復興上演の担い手にもなっていた）の劇場（現テアトロ・リノヴァーティ）における、1790年夏の上演告知である^[13]。資料はシエナ市立図書館が所蔵する、同時代の蒐集家バンディーニ（Antonio Francesco Bandini, 1759–1839）によるコレクション「シエナ日記」（1785–1838年）の膨大な資料の一片である。

ここでは、一段目に“Primo Soprano”（第一ソプラノ、ここではカストラート歌手）と“Prima Donna”（第一女性歌手、ここではソプラノ歌手）が歌手名とともに記され、一段下がったところに“Primo Tenore”（第一テノール歌手）が記されている。つまり、主役級の歌手らは上段にまず書かれ、テノール歌手は第一歌手でもそのやや下に置かれており（図4）、ソプラノ歌手と比較してテノール歌手が「二番手」であること、つまり声域による歌手の「格付け」を示している。当時、声域が作品内の役の重要度に直結していたためである。文字情報のみでデータベース化するとこのような視覚的情報は失われることとなり、単なる公演記録として

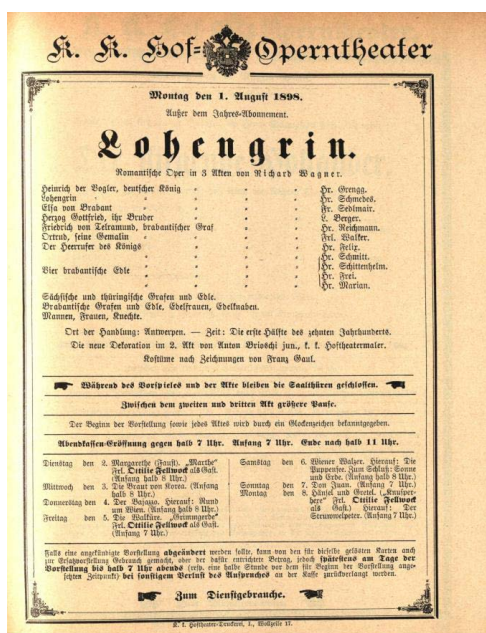


図1 《ローエングリン》ポスター（1898年8月1日）^[11]

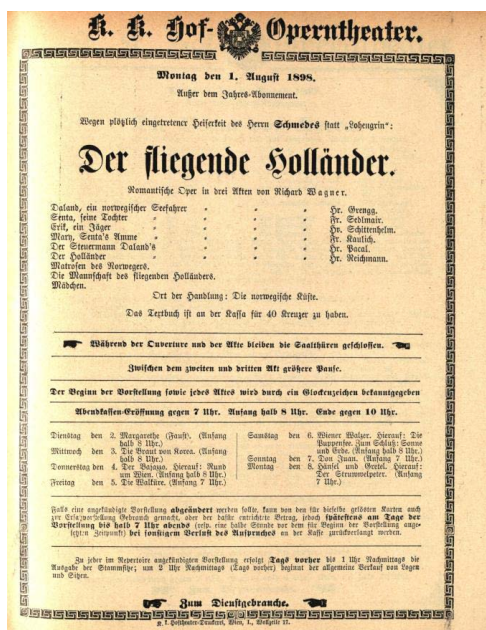


図2 《さまよえるオランダ人》ポスター（差し替え版）^[12]



図3 アカデミア・デッリ・イントロナーティの新劇場（シエナ）の1790年夏の上演告知^[13]

だけではすくいきれない情報が存在する例であろう。



図4 図3の拡大図（出演歌手の欄）

3.3 時代の変遷による項目の出現や消失

公演ポスター等には、現代では自明のように記録されている項目が、時代や地域においては記録されない、あるいは名称自体が異なっている場合もある。例えば、作曲家や指揮者、台本作家等がそれにあたる。

先ほどの図3においては、作曲家であるアンドレオッジ（Gaetano Andreozzi, 1755–1826）の記載はあるものの、台本作家がメタスタージオ（Pietro Metastasio, 1698–1782）であることは記されていない。さらに歌手は“Attori”（俳優、演者）とされており、歌手や音楽家というよりも「劇を演じる者」とであるという意識が透けて見える。

別の例として、ドイツのライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団における「オペラの抜粋上演」の例を見てみたい。ゲヴァントハウス管弦楽団の演奏会プログラムに関する本記述については、下記の論考にも掲載している^[14]。ゲヴァントハウス管弦楽団は1781年から年間20回程度の予約演奏会（定期演奏会）を現在まで継続している団体である。ライプツィヒ市資料館に所蔵されているポスターを調査すると、1825年頃まではほぼすべての演奏会で、それ以降19世紀末頃までは約半数の演奏会で、オペラ作品の抜粋がプログラムに組み込まれている。

その際、作曲者名、オペラ名、演奏者名と歌詞全文がプログラムに記載されたが、個別の作品名は記載されなかった。歌詞全文の記載があるので、作品特定は可能である。データ作成上の問題は、演奏者名の記載が無い場合の対応である。独唱の場合は、ほとんどの例で記載があるが（9割程度）、二重唱以上の人数になると、記載の有無に幅が出る。記載が無くとも演奏者が明らかな場合、記載自体を尊重する在り方と、事実を尊重する在り方の判断が、データベース作成者に問われるだろう^[14]。

2つの事例では、長いスパンで記録をデータ化する場合、これらの項目の有無や見出しも一つの情報としてデータベースに含むのか、それともそのデータの不在

を「データ欠損」としてみなし、研究者が補うべきなのか検討が求められる。

3.4 備考欄の情報の取捨選択

先ほど3.1において歌手の変更理由について述べたところであるが、資料には様々な「備考」が書かれており、それらも当時の価値観を反映していると考えられる。ハンガリー王立歌劇場（現ハンガリー国立歌劇場）を例にとると、開場25周年記念資料集（資料種類④）の上演演目一覧には、日付・会員券種・作品名・客演・備考が記載されている。そして備考欄には、チケットの価格設定のランク・王や王妃の臨席・王や王妃の聖名祝日・特別公演情報などが記されているほか、「国民劇場年金機構のため」といった文言が見られる^[15]。年金基金のための公演だったことが推察されるが、これらがどの程度重要性を持っていたのかも含め、データ化する際にどの範囲まで網羅すべきか検討が必要だろう。実際、ハンガリー国立歌劇場によるデジタルアーカイブ^[16]にはチケットの価格設定の情報は収録されていない。

3.5 上演言語

オペラの上演言語は様々であり、どの言語で上演されたか（歌唱されたか）が作品受容の文脈において非常に重要な意味を持っている。例えば、オーストリアでは18世紀から、マリア＝テレジアの劇場政策やヨーゼフ2世の劇場改革以降、上演言語が政治によって左右された。宮廷文化としてのイタリア語やフランス語に対して、さらに国家言語としてのドイツ語という様々な言語が併存、時に拮抗しながら音楽劇上演が行われてきた歴史がある^[17]。

上演言語はポスター等に記載されている場合もあるが、逆にポスターのみではわからない場合ももちろんある。具体的に見てみよう。ウィーン宮廷歌劇場でのモーツァルト（Wolfgang Amadeus Mozart, 1756–1791）《ドン・ファン》（《ドン・ジョヴァンニ》）（1897年8月22日）には、台本が原語でないことを示す一行が入っている。演目名である“Don Juan”の下に「ドイツ語上演のためのマックス・カルベック（Max Kalbeck, 1850–1921）による自由翻案」とあり、イタリア語の原語上演でないことを示しているのだ^[18]。

一方で、ビゼー（Georges Bizet, 1838–1875）《カルメン》（1897年10月8日）の上演ポスターには、翻訳・翻案の記載がない^[19]。他のポスターと比較するとこれは極めて例外的であることから、記載がないことだけでドイツ語上演ではなかったと判断することはできな

い。ポスター「のみ」を通した分析の限界を示しているだろう。

3.6 作品の改変

先ほどの《ドン・ファン》のように「翻案」という記載がある場合、どの程度の改変がなされていたのか——つまり名前のみを現地化した程度だったのか、ストーリー等も変わっているのか——を考えると、上演演目を翻案前の作品と同一視して良いかどうかという問題も浮上する。

例えばロシア帝室劇場には厳しい検閲があったことから、宗教的制約（神、悪魔を描くことを忌避）や、革命や共和政を肯定するような事件を扱うことが制限された。そのためオペラの内容（タイトル、時代や場所、登場人物の名前等）も大幅に変えられることがあった。フランスのグランド・オペラの例を見ると、オベール（François Auber, 1782–1871）《ボルティチのおし娘》（1828年世界初演）は《パレルモのならずもの》（1857年）、アレヴィ（Jacques Halévy, 1799–1862）《ユダヤの女》（1835年世界初演）は《枢機卿の娘》（1837年）、マイアーベア（Giacomo Meyerbeer, 1791–1864）《預言者》（1849年世界初演）は《ヤン・ファン・ライデン》（1869年）等に変えられている^[20]。これらの場合、演目名だけでなく、内容も鑑みて判断する必要が求められるだろう。

4. おわりに

本稿では、上演演目データの整理・分類における諸課題を提示してきた。オペラ公演については、演奏会と比較してレパートリー研究がそれほど進展していないことが指摘されており^[21]、近年研究の数は増えてきているものの、その数は多くはない。そのような状況下で興行データを蓄積していくことは、社会史や経済史などの文脈で劇場を取り巻く環境を考察したり、さらに芸術史においても作品の正典化を解明する上で不可欠な作業である。

本研究チームは当初、さまざまな劇場のすべてのデータを網羅した「統合」作業を目指していた。しかし本論で見てきたように、時代や地域によってそれぞれの資料自体に特性や価値観が反映されているため、全部を統合しようとするには2通りのデータベース構築が考えられる。すなわち、資料にある項目すべてを網羅して項目立てした、最小公倍数的なデータベースの構築か、日付と演目名だけといった共通の項目立てのみを行う最大公約数的なデータベースの構築である。

前者については、項目数が無限でもデータベース化

できるというデジタルアーカイブの長所を生かすことができる。時代・地域による項目立て時代の変遷等、さまざまな変化が可視化される可能性があり、利用者の便宜を考えれば将来的に実現が目指されるべきものであろう。その一方で、注記も含めたデータ量が膨大になる、また各レコードで使われていない項目が無数に存在し無駄が多くなる、地域・時代によって意味内容の異なる同一項目内を検索する際に混乱が起こりうる、さらに3.2で述べたような視覚情報までを網羅するのが困難なことなど、現時点で実現するには限界があるように思われる。

後者については、おそらくそれ自体は価値あるものではあるだろうが、そもそも日付と演目名のデータすらも判然としないものも多く、比較研究でそのデータベースを利用して発見の少ないものになる可能性がある。項目の見出しにすら変遷が見られるように、興行データにおける「発見」は、どの切り口から見るかという抽出の仕方、変数に負うところが大きい。そのため、研究の目的に沿った形でデータベースを作成しようとする、データを削ぎ落とせざるをえず、汎用性とのジレンマに陥ることとなる。

「公演データベース」と聞くと、上演劇場、主催者、公演日、演目および作者、演奏者、入場料、配役、そしていくばくかの「備考」、といった情報を記載順にデータ入力すればよいような印象を持つが、実際の記録は単なるテキスト情報以外にこれほどに豊かな周辺情報を有しており、記載内容が無機的にデジタル化するだけでは、これらを十分に活用しきれない。

以上を踏まえて、研究に活用できるデータベースはどのような形がふさわしいだろうか。周辺情報を含めすべてを網羅したものを一度に作ろうとするよりは、多くの研究者の興味を惹きつけることが見込める個別のテーマ（例えば共通に上演されている演目、有名な歌手に特化するなど）を設定した上で、多少の周辺情報を盛り込みながら統合するのが現実的だろう。すでにそのような試みは作品研究や作曲家研究においていくつか存在しているため（例えば、ヘルベルト・フォン・カラヤンの録音や出演コンサート情報を網羅したデータベースなど^[22]）、例えば今後は一劇場・一団体ではなく都市全体や、同じ原作を持つ作品群、リブレッティストを中心としたデータベースなどが考えられる。

上記の提案はそのまま本研究の方針の再検討の必要性や今後の課題に直結する一方で、これまで述べてきた知見は、横断比較用のために集まったデータのバラエティの広さがあってこそ得られたものである。各時

代・各地域の資料を横並びにすることによって初めて、どのデータ（項目）を大事にするのかという地域や時代の価値観が可視化されたとも言える。その点で本稿は新たな視座を提供しており、今後の歌劇場データベース作成に資する一つの成果であろう。

註

[註1] 本稿は、日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤研究 (C)「ヨーロッパ音楽劇上演の変遷と伝播：言語と地域の横断的研究」(課題番号：19K00150)の成果である。

参考文献

- [1] Nicholas Till, "The operatic event: opera houses and opera audiences," *The Cambridge Companion to Opera Studies*, ed. Nicholas Till (Cambridge UP, 2012), 70.
- [2] 神竹喜重子「『ホヴァーンシチナ』が日の目を見るまで：1892年のキエフにおける舞台初演」佐藤英、大西由紀、岡本佳子編『オペラ／音楽劇研究の現在：創造と伝播のダイナミズム』（水声社、2021年）、63-87.
- [3] *Opening Night! Opera and Oratorio Premieres*. <https://exhibits.stanford.edu/operadata> (参照 2023-06-24).
- [4] Richard Parrillo, *From Don to Giovanni: opera database; oratorio database* (Bellevue, Wash.: Sibylline Books, 1997).
- [5] *Internet Broadway Database (IBDB)*. <https://www.ibdb.com/> (参照 2023-06-24).
- [6] *Spielplanarchiv der Wiener Staatsoper* [ウィーン国立歌劇場 上演目録アーカイブ]. <https://db-staatsoper.die-antwort.eu/> (参照 2023-06-24).
- [7] 大矢未来「近年の音楽劇データベースの公開状況」早稲田大学オペラ／音楽劇研究所発行『早稲田大学オペラ／音楽劇研究所主催 公開シンポジウム 歌劇場のプログラム分析から見えるもの—音楽劇データベースの構築と利用法—報告書』（2016年）31-35.
- [8] История русской музыки. Т. 10В: 1890–1917. [ロシア音楽史 第10巻 1890–1917] Хронограф. Кн. II. Под ред. Е. М. Левашева. М.: Языки славянских культур, 2011, 15.
- [9] Киевское слово [『キエフの言葉』] no. 1718, 26 October 1892, 2.
- [10] オーストリア国立図書館デジタルアーカイブ (AustriaN Newspapers Online, ANNO). <https://anno.onb.ac.at> (参照 2022-11-02).
- [11] ANNO, Theaterzettel der beiden k.k. Hoftheater und des k.k. priv. Theaters an der Wien und ihrer Nachfolgerinstitutionen (tit. fict.), 1898-08-01, Seite 1. [オーストリア国立図書館デジタルアーカイブ、両宮廷劇場、テアター・アン・デア・ウィーンおよび後続組織の公演ポスター、1898年8月1日、1ページ]. <https://anno.onb.ac.at/cgi-content/anno?aid=wzt&datum=18980801&seite=1&zoom=33> (参照 2022-11-02). オーストリア国立図書館蔵.
- [12] ANNO, Theaterzettel der beiden k.k. Hoftheater und des k.k. priv. Theaters an der Wien und ihrer Nachfolgerinstitutionen (tit. fict.), 1898-08-01, Seite 2 (onb.ac.at). [オーストリア国立図書館デジタルアーカイブ、両宮廷劇場、テアター・アン・デア・ウィーンおよび後続組織の公演ポスター、1898年8月1日、2ページ]. <https://anno.onb.ac.at/cgi-content/anno?aid=wzt&datum=18980801&seite=2&zoom=33> (参照 2022-11-02). オーストリア国立図書館蔵.
- [13] In Siena nel nuovo teatro della nobilissima accademia degli Intornati. L'estate dell' anno MDCCLXXX. Antonio Francesco Bandini, Diario sanese (1785–1838). Biblioteca Comunale degli Intornati, Istituzione del Comune di Siena. [シエナ、アカデミア・デッリ・イントロナーティの新劇場 1790年夏の上演告知. アントニオ・フランチェスコ・バンディーニ、シエナ日記 1785–1838年. イタリア、シエナ市立図書館所蔵コレクション]
- [14] 小石かつら「『書かれていないこと』は何を意味するのか—ライブツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団のプログラムをさぐる—」『美学論究』（関西学院大学美学芸術学会）36 (2020): 67-71.
- [15] A M. Kir. Operaház Igazgatósága, A Magyar Kir. Operaház 1884–1909: adatok a színház huszonöt éves történetéhez [ハンガリー王立歌劇場統括部『ハンガリー王立歌劇場 1884–1909年：劇場25年史の記録』]. (Budapest: Markovits és Garai, 1909), 35など多数.
- [16] ハンガリー国立歌劇場オペラ・デジタルアーカイブ Opera Digitár. <http://digitar.opera.hu> (参照 2022-11-02).
- [17] 大河内文恵「1760年代から1830年までのヴィーンにおけるオペラ上演についての試論—ドレスデン・ベルリンとの比較から—」『東京芸術大学音楽学部附属音楽高等学校研究紀要』17(2022): 51-57.
- [18] ANNO, Theaterzettel der beiden k.k. Hoftheater und des k.k. priv. Theaters an der Wien und ihrer Nachfolgerinstitutionen (tit. fict.), 1897-8-22, Seite 1 (onb.ac.at). [オーストリア国立図書館デジタルアーカイブ、両宮廷劇場、テアター・アン・デア・ウィーンおよび後続組織の公演ポスター、1897年8月22日、1ページ]. <https://anno.onb.ac.at/cgi-content/anno?aid=wzt&datum=18970822&seite=1&zoom=33> (参照 2023-06-25). オーストリア国立図書館蔵.
- [19] ANNO, Theaterzettel der beiden k.k. Hoftheater und des k.k. priv. Theaters an der Wien und ihrer Nachfolgerinstitutionen (tit. fict.), 1897-10-08, Seite 1 (onb.ac.at). [オーストリア国立図書館デジタルアーカイブ、両宮廷劇場、テアター・アン・デア・ウィーンおよび後続組織の公演ポスター、1897年10月8日、1ページ]. <https://anno.onb.ac.at/cgi-content/anno?aid=wzt&datum=18971008&seite=1&zoom=33> (参照 2023-06-25). オーストリア国立図書館蔵.
- [20] Ежегодник императорских театров [『帝室劇場年鑑』] (СПб., 1890–1915), Marina Frolova-Walker. "Grand opera in Russia: fragments of an unwritten history," Charlton, David, ed. *The Cambridge Companion to Grand Opera* (Cambridge UP, 2003). 平野恵美子「ロシアのグランド・オペラとバレエ」『バリ・オペラ座とグランド・オペラ』丸本隆ほか編（森話社、2022）, 420-424.
- [21] Nicholas Till, "The operatic work: texts, performances, receptions and repertoires," *The Cambridge Companion to Opera Studies*, ed. Nicholas Till (Cambridge UP, 2012), 236. William Weber, "Art, Business, Canon and Opera: Two New Studies," *The Opera Quarterly*, 25/1-2(2009), 157-64.
- [22] *Discover Karajan: Recording & Concert Catalog*. <https://discoverkarajan.com/> (参照 2023-06-24).



この記事の著作権は著者に属します。この記事はCreative Commons 4.0に基づきライセンスされます(<http://creativecommons.org/licenses/by/4.0/>)。出典を表示することを主な条件とし、複製、改変はもちろん、営利目的での二次利用も許可されています。